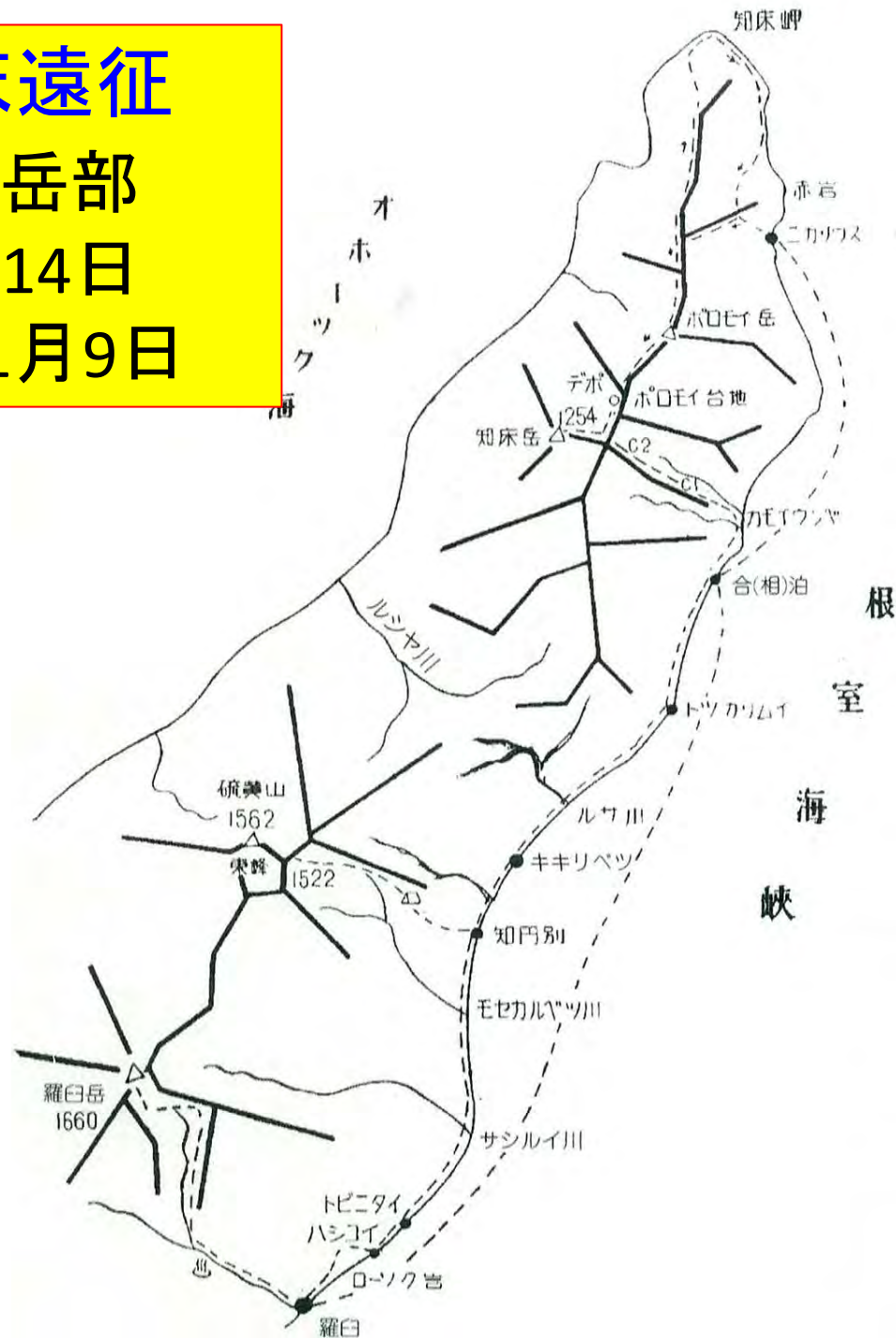


厳冬期知床遠征

京都大学山岳部

1952年12月14日

～1953年1月9日



メンバー:

伊藤洋平(隊長)他、全12名

・縦走隊 3名(12月16日～1月1日)
ニカリウス～知床岬～知床岳

・本隊 (12月16日～1月1日)

9名3班

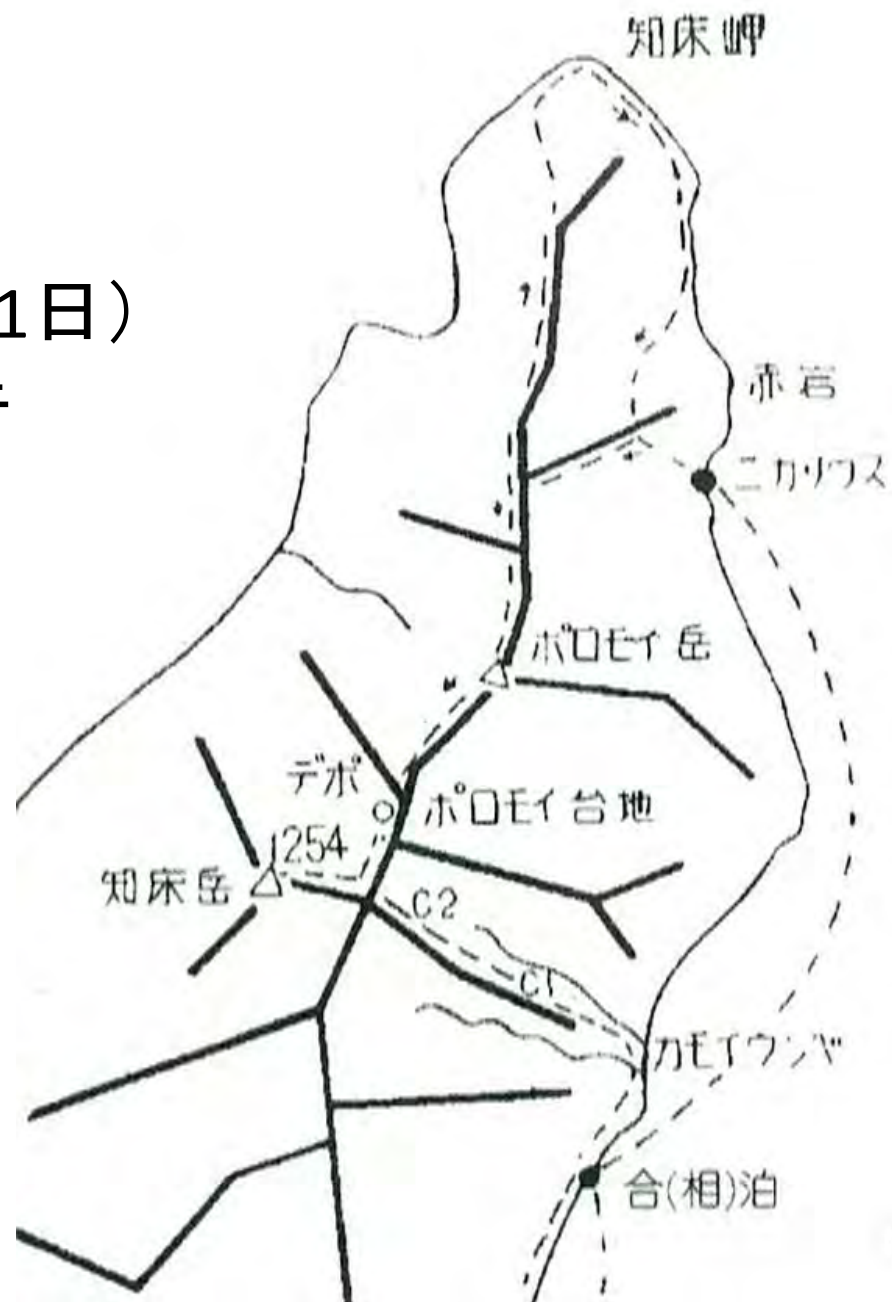
カモイウンベBC、C1、C2、

知床岳(12月25日初登)

12月28日に縦走隊収容

・後半山行(1月3日～9日)

硫黄山、羅臼岳アタック



脇坂 誠

伊藤洋平

廣瀬幸治

川瀬裕史

中川 潔

杉山喜一

中島道郎



寺本 巖 藤村 良

平井一正

山口 克

斎藤惇生

この遠征の意義

- 未知であった厳冬期の知床岬~知床岳の踏査
- 日本のヒマラヤ登山が活発になる時期に、
ヒマラヤ遠征のひな型となる山行であった。
- 極地法の訓練、遠征用装備、食糧の準備
その後のヒマラヤ遠征に活かされた。
- 参加隊員の多くが、その後、ヒマラヤ遠征で
活躍



羅臼岳～知床岳
の山なみ

羅臼岳
山頂



流水原～知床岬からの縦走

京大山岳部 1971年3月

吉越亘(L)ほか、全7名

- ・ 前半(3月15日～24日)

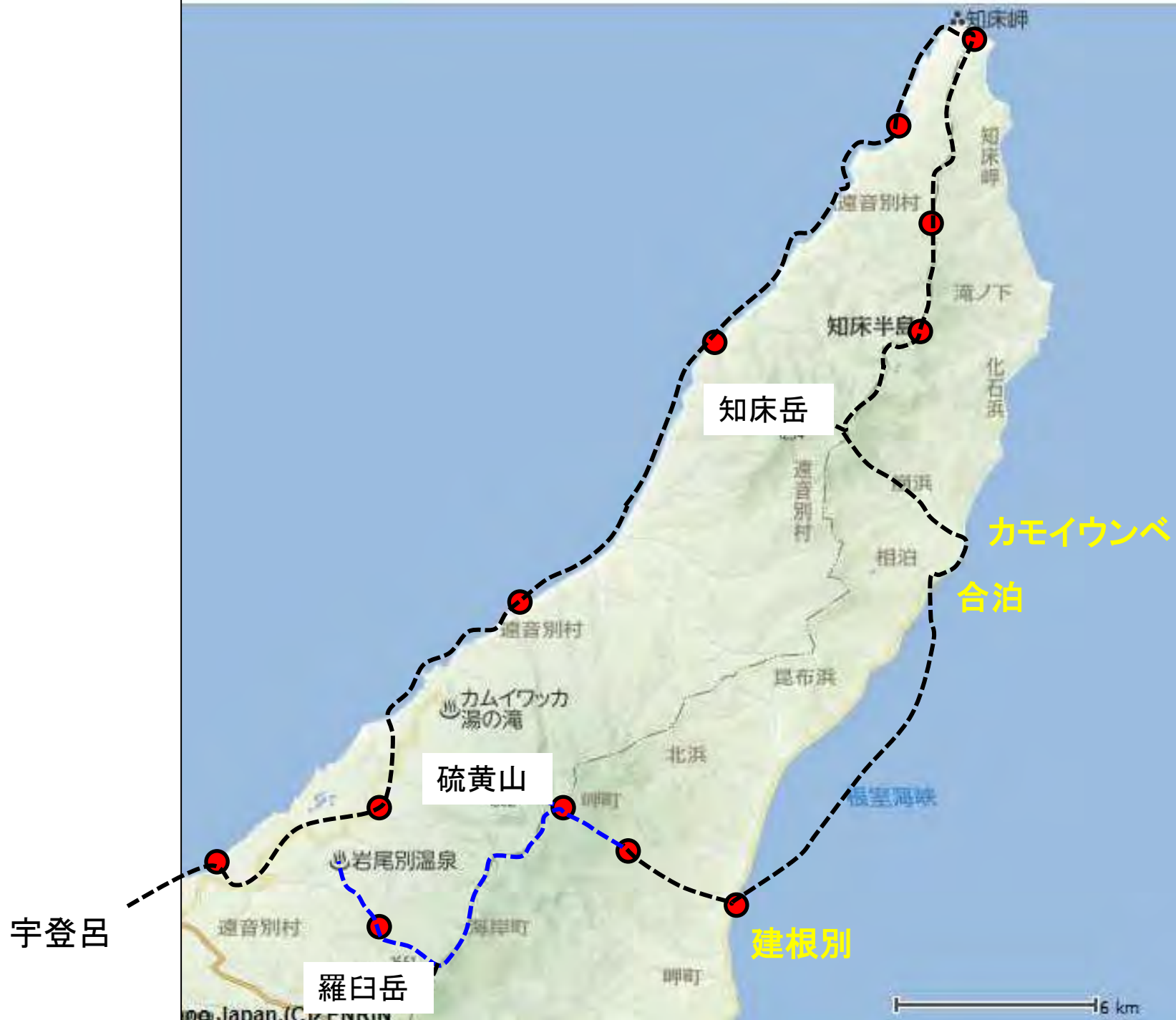
宇登呂～流水原～知床岬～知床岳～カモイウンベ

- ・ 後半(3月25日～31日)

建根別～硫黄山～羅臼岳～岩尾別

ユニークな点

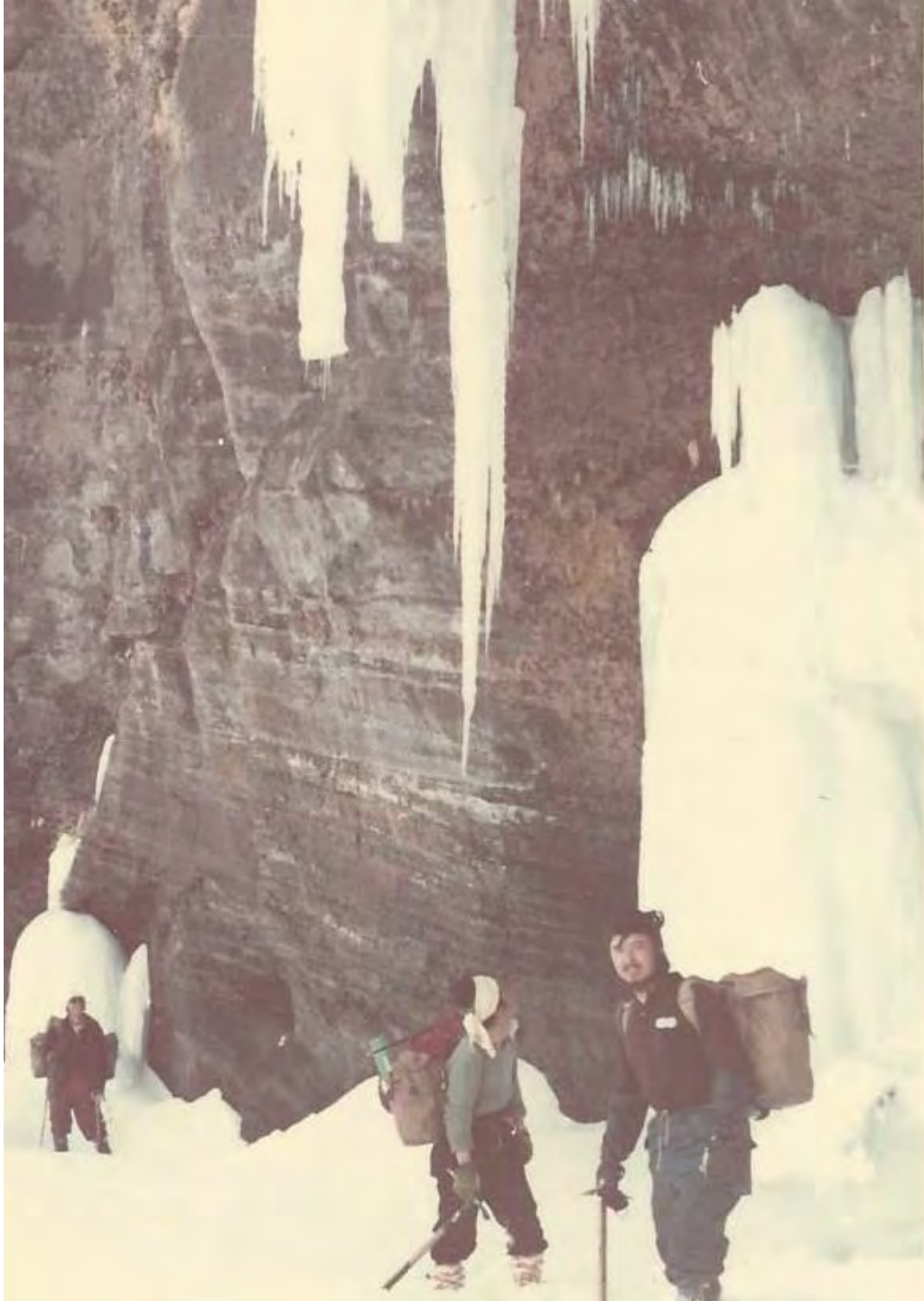
- ・ 岬までの流水原踏破



流氷原の歩行

- スキー歩行が安全だが、この時は採用せず。
- 流氷は風で急に流れ出すことがあるので、
沖合まで出ず、岸近くを歩行。
- 氷板が折り重なり、その隙間の平らな海氷を
選んで歩く → ジグザグなルート
- 河口付近、海氷が薄く、要注意
- 岬近くは沿岸氷（その場の海水が凍結）が発達し、
歩き易い。





チャカババイ
北方の岸壁に
懸かる氷柱



タコ岩手前の番屋へ、平坦な海氷上を歩く



カシュニ
の滝



カニのハサミ番屋 裏手の氷瀑



オケッチウシ川の河口



知床岬にて



知床岬台地と流氷



952mピークから知床岬を望む





知床台地北東尾根から見た、知床岳
北面盆地と、オケッチウシからの雪稜



知床台地から知床岳を望む



知床台地北東尾根から知床岳を望む？



知床岳より見た硫黄山



カモイウンベ川左岸の尾根を下山



カモイウンベ河口付近、流氷が消え残る海



流氷に囲まれ湖のように静かな海



ウニ採り船に便乗しケンネベツへ

後半の山行 硫黄山東岳



新雪の夜明け



硫黄山（最奥のピーク）



硫黃山
山頂